

かけ橋

第18号

2001年11月27日発行

新潟国際ボランティアセンター事務局
951-8126 新潟市学校町通2番町5293番3
学校町ビル4F
Phone & Fax: 025-222-7899



13年目の曲がり角？

誕生以来13回目を数えた
愛のかけ橋バザー。
今回は当初から商品の集まりが
思わしくなく、一時は「開催に
黄信号」なんて声も。その後の奮闘
で結果は心配されたほどではなかつた
ものの、ここ数年常に前年を上回って
いた売上げが大幅にダウンしました。
どうも、巷にはバザーを取り巻く環境
の変化があるようです。NVCにも、
新たな進化が求められている!?



毎年若者パワーが爆発するNVCのバザー。会場で行われたラオスタディ・ツアー報告会の面々

CONTENTS.....

第13回愛のかけ橋バザー開催レポート	2
バザーを振り返って	
スタッフアンケート/お客様アンケートより	
協力者名簿	
特集 NVCとお金	8
支援の思い どこからどこへ?	
認定NPO法人制度ってご存じ?	
特別寄稿「高知商業高校のエコメディア」	12
枝廣淳子(環境ジャーナリスト)	
Hot News	14
「NVC地球を知る講座」開催報告 関 洋介/渡辺順美	
「ボラフェス2001エイ!エイ!FOR~」参加レポート 関 洋介	
ラオスタディツアーレポート 永井亜弥	
お知らせ - JVCカレンダー2002/アフガン難民救援緊急募金	
リレー・トーク ~ NVC's Human Network ~	18
水落春雄さん/筒井昭仁さん/峯村康明さん/大竹康子さん	
事務局だより	20

不況からの出口が見えない日本。世界情勢までさらに混迷の度を深める昨今、第13回目のバザーは本当に苦勞しました。まず、商品が集まらない。おまけに、当日は他のバザーや近くの商店街のイベントと重なり、通りすがりのお客さんの確保にも一苦勞。そんな中、スタッフの努力と協力者の皆様のおかげで何とか上げた収益は：¥2,773,471円（売上げ+寄付金の合計）というまずまずの成果でした。

一方、ヒューマンパワーの方は例年通り恵まれて、商品の搬入や値段付けで延べ79人、当日の2日間で延べ295人のボランティアスタッフが今回のバザーを支えてくれました。

加えて、2日間のお客様が計1,852人。NVCと世界をつなぐ貴重な資金源は、こうして今年も守られました。

とき：2001.10.13(Sat.) - 14 (Sun.)
ところ：新潟中郵便局3F体育館



ご協力ありがとうございました

愛のかけ橋バザー実行委員長
嶋田 正義

今年も昨年同様、新潟中郵便局体育館をお借りして、10月13・14日の2日間わたって大盛況のうちに「第13回愛のかけ橋バザー」を開催することが出来ました。今年も昨年以上にデフレスパイラルに入り込んでものがき苦しんで抜け出せず、平均株価は10,000円前後でしか推移出来ない今の日本経済では、昨年の半分も品物が集まれば良しとする中で、皆様の協力及び会員一人一人の努力のおかげで昨年より20%程度の減少に止まりましたが、古町どんどの影響がもろに出て、客足はさっぱり伸びず初日は今までにない800人程度の入場者でした。

しかし、外宣舞台のガンバリで、特に古町どんどの韓国フェスティバルの大声コンテストでマダガスカル灼熱の太陽の下で乾ききった大地を掘ながら鍛え上げた声でバザーのPRをして下さった学生達のおかげで（結果は第1位と第3位に入り本人達はまんざらでもなかったようですが）初日より200人多い1,000人台に盛り返しましたが、全体で昨年よりも400人以上少ない1,852人でした。それに比例したのか売上額も昨年よりも50万円程度少ない1,774,450円でした。しかしこの大不況で物が売れない中でのこの金額は大健闘だったと言えるのではないのでしょうか。



朝の全体ミーティング。心が一つになり、身が引き締まる瞬間

これもひとえに、私の大好きなバナナ始めグレープフルーツ・ヨーグルト・スナック等の数多くの品物を提供して下さいました各企業の皆様方、そして市民・人々の皆様方のバザーに対する理解のおかげです。又、今回初めて参加下さいました弘前大学の学生さん始め県外からは東京、富山から、そして市内の各大学、高校、留学生の皆さん及び社会人のボランティアの皆様方本当にありがとうございました。お陰様で無事バザーを終了することができました。

最後になりましたが、今年もたくさんの商品を提供して下さい下さった方々、また会場をお貸しいただいた中郵便局の皆様、バザーを側面から支援して下さい下さった郵便局関係の皆様、バザー開催を採り上げて報道して下さい下さったテレビ・ラジオ・新聞等の報道関係の皆様、ありがとうございます。どうか今年も13個目の「新潟の愛」をラオス・ベトナム・バングラデシュへ輸出することが出来ました。これからも途切れることのないよう皆様方と共に歩んで行こうと思っていますので、今以上のご協力とご支援をいただきますようお願い申し上げます。「第13回愛のかけ橋バザー」協力者皆様方へのお礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。

バザーを終えて

吉田 あすか

私の通っていた高校では、年間行事の1つに病院、老人ホーム、養護施設などへのボランティア活動があった。行事の時期になると毎年先生は、ボランティアとは「してあげる」という気持ちで参加するのではなく、「させていただく」という気持ちで参加するので、と私たちに心構えの注意をしてくださっていたことを憶えている。私はその頃なぜ先生はボランティアへの参加に際し、そのような注意をされるのか特に気に留めていなかった。

なぜなら、私はボランティアの魅力がわからなかったからだ。参加をすることで、給料がもらえるわけでもなく、むしろ交通費など経費のかかる活動。困っている人を助けるという目的は、人として大切なことだけれど、だからといって、お金持ちでもない私がわざわざ参加をしても、失うものはあっても、得るものはない。私から見たら、何の利益もない活動に見えていた。

けれど、1997年に起きたロシア・タンカー重油流出事故でのボランティアの役割の大きさ、成果を知る機会があったから、なぜか気になりはじめた。私からはそのようにしか見えないボランティア活動になぜか

が集まり、活動が成立するのか。その魅力とは何なのか。

そこで、実際に自ら活動に参加することで、何か見えてくるものがあるかもしれないと思い、NVCへ通わせて頂くようになった。

今回のバザーを通じて、感じたことがあった。それは、活動への参加を楽しみと感じたことだ。普段の学生生活では、話す機会の少ない人たちと関わりをもちたり、社会人へ向けて学ぶことがあったり、これまで気が付かなかった自分自身の一面を発見できたりと全てのことが私にとっては楽しく感じられ、ボランティアとは、一方的なものではなく、お互いに得るものがある活動である、ということを実感することができた。

そして、なぜ高校時代に先生がボランティア参加に際して、そのように考えておられたのかについても、少しばかり理解できたのではないかなと思う。



開場直前の売場チーフミーティング。みんな真剣そのもの

心に栄養をありがとう

桐山カツ子

今年の春で勤めを終え、憧れていた自由の身となり、時間の許す限り仲間と趣味を楽しみ、好きな読書に没頭した。しかし1ヶ月、2ヶ月と過ぎていくうち心の片隅に何かしら満たされない部分があることに気がついた。（なぜだろう。自由に好きなことをやっているのに・・・）と自分自身を扱いかねていた。

そんな時、谷口さんからNVCのバザーの話をお聞きして、お手伝いしてみようかと思立った。バザーの2日前から品物の値付けのお手伝いに参加した。全く初めての参加ということで、不安な気持ちのまま会場におじゃましたところ、会長さんをはじめ皆さんに気持ちよく仲間に入れていただいて楽しく仕事が出来た。

さて、いよいよバザー当日。開店前からお客さんが並び始めたのにはびっくりした。今までやったことのない販売。お客様の要望に上手く応えることができるだろうか、お金の計算を間違えないだろうかという諸々の不安も、一



緒に仕事をしている人たちに元気づけられ、どうにかロボット人間にならなくてすんだ。

2日目は少し慣れてきて、自然に「いらっしやいませ」と大きな声が出ていたのには自分でもびっくりした。やっているうちは無我夢中であったが、帰りの電車の中では腰が痛いし足が棒状態になっていることに気が付いた。しかし、それに反比例するように、心の中がとてもさわやかなのだ。鼻歌が出そうなほど楽しい気分なのだ。あの心の片隅の重い部分がすっかりなくなっていたのだ。

「そうだ。私がやりたかったことは、こういうことなのかもしれない！」

今回は、ボランティアという意味もよくわからず参加したのだが、結果的にはこの数日間にいろいろな面で私がボランティアを受けていたのだということに気付いた。遠距離から寝袋持参で参加している学生達の頼もしさを目の当たりにし、また、家からおにぎりを作ってきてさりげなくテーブルに置いていく人、黙々とゴミ回収に全力投球している人・・・。一人一人がみんな輝いて見えた。一人一人の表情がとてもさわやかなのだ。このようにたくさんのすばらしい人たちに出会えたことが、私にはとても幸せだった。みなさん、心に栄養をありがとう。

スタッフアンケート より

今回のバザーでは、初めての試みとしてボランティアスタッフに対するアンケートを行いました。

119人の回答を得、その内訳は：

	学生	会社員	公務員	主婦	その他	計
男性	62	2			1	65
女性	47	2	1	4		54

でした。

「バザーを何で知ったか」

「大学のゼミで」という回答が50人と最も多く、全体の4割以上を占めました。次いで「友達から」(30人)、「かけ橋で」(20人)などです。

「収益金の使途を知っているか」

ほとんどの人が知っていましたが、10人位知らない人がいました。

「商品を販売する時お客様のやりとりで困ったことがあったか」

約3分の1が「あった」と回答しました。具体的には、
値段の交渉 / 商品に関する知識不足で説明ができない / 衣料品売場に鏡がない / いつまでも世間話をして動かない / ビラを受け取ってもらえないなど。

「お手伝いをしていて不足している物があったか」

23人が「あった」と回答しました。次のような声がありました。
ビラ・情報宣伝の意識不足・事前のアピール不足・認知度の低さ
指示系統 / 人員配分シフトの不足
人材不足(やる気があるのかどうか)
昨年データ(値段)が欲しい
小さい袋・小銭(特に50円)・新聞紙(食器売場)の不足

「ボランティアで参加した動機」

NVCのバザーの内容を知るため / 地域でのNGOの活動に興味があった / 授業の一環で / 人の役に立ちたかった / 学校からの呼びかけ

「ボランティアをして心に残ったこと」

楽しかった。
接客は難しかったが、人との触れ合いができて嬉しかった。
スタッフの人達の目がすごく輝いていて感動した。
若い人達のさわやかな笑顔がいっぱいで素晴らしい。
システマ的なこと、運営などでいろいろな疑問を感じた。
単位取得のためにボランティアに参加するのはどうか？
開催日当日の宣伝の数、方法の再考が必要。
商店街とのタイアップはできないのか？

本当にごくろう様でした。来年のバザーの参考にさせていただきます。

昨年に引き続き、2回目のお客様アンケートを実施。さて、今年の傾向は？

*アンケートの回答数合計は、H12=349、H13=350です。

【回答者性別・年代別内訳】

	H12	H13
(男性)		
10才未満	0	0
10代	8	2
20代	8	10
30代	12	10
40代	7	16
50代	18	14
60代	9	9
70才以上	10	8

	H12	H13
(女性)		
10才未満	1	0
10代	10	19
20代	17	21
30代	23	25
40代	32	41
50代	44	57
60代	27	63
70才以上	28	24

	H12	H13
(計：性別無回答含む)		
10才未満	2	1
10代	19	21
20代	32	33
30代	45	35
40代	46	58
50代	80	78
60代	63	84
70才以上	54	39

【このバザーを何で知りましたか？】

	H12	H13
街頭呼びかけ	84	133
友人/家族	67	59
新聞	46	51
ポスター/チラシ	54	45
テレビ	84	27
市報	10	1
NVC会報	8	6
ラジオ	10	3
インターネット	0	1
その他・無回答	17	13

【何回目の来場ですか？】

	H12	H13
初めて来た	196	196
昨年も来た	59	51
何回か来た	84	102
無回答	2	1

【収益金の用途を知っていましたか？】

	H12	H13
知っていた	188	172
今日初めて知った	92	139
無回答	61	39

お客様アンケート より

【40代～60代の女性が急増】

性別・年代別の傾向では、去年と比較して中高年の女性の伸びが目立った。バザー来場者の中心な層がますます厚みを増したとすることができる。また一方で10代の女性も倍近くに伸びている。

【通りすがりで寄ってくれたケースが目立った】

「バザーを何で知ったか？」という問いに対し、「街頭の呼びかけで」という回答が異常な伸びを示した。当日は近くの商店街でイベントが開催されていて、そこでも呼びかけが功を奏したと見られる。

【リピート傾向強まる】

「何回か来たことがある」という回答が前年比約20%増の伸びを示した。このバザーのファンが年を追う毎に増えていくのは歓迎すべき傾向であるが、来年は「3度目の正直」となるか？

【課題はアピール力の増強】

近隣商店街のイベントは通りすがりの買い物客にバザー会場まで足を運んでもらう効果を生み出したが、結果としてバザーの目的を知らずに来場した人々の数が急増した。これは裏返せば、まだまだ一般の認知度が足りないことを物語っている。自由意見欄にも「宣伝が下手なのは？」、「もったいない」という声が多く寄せられている。今後の課題である。

その他、お客様からはこんな声がありました。

若い人達が一生懸命に活動している姿に感動致しました。来年も続けて下さい。 60代
本当にアジアの人達の為に使っているのか？ 10代女性
毎年来たいのでメールマガジンでも発行して下さいうれしいです。HP「祈りの園」みたいに不定期なお便りでもいいと思います。 30代女性
10回目です。 70才以上男性
次回は友人と来たい。 50代女性
定着した行事にして下さい。 60代男性
継続=力なり。 50代男性
心温まる思いがします。若い方々のエネルギーを感じ、がんばっていることに頭が下がる思いです。少しでもお手伝いしたい。 30代女性
こういう活動は本当に大切だと思います。大変ですが続けて下さい。 40代女性
皆さんの努力がアジアの人達の幸せにつながることを心から祈っています。 30代女性
機会があったらお手伝いをしたい。 40代女性

新潟発の国際貢献—— NVC第13回愛のかけ橋バザー ご協力いただいた皆様

< 郵便局関係 >

新潟中郵便局
新潟中央郵便局
新潟女池郵便局
新潟貯金事務センター
新潟西郵便局
坂井輪郵便局
新潟本町十三番郵便局
赤塚郵便局
新潟中島郵便局
内野町郵便局
真砂郵便局
新潟関屋本村郵便局
五十嵐中島郵便局
新潟南浜通郵便局
鹿瀬郵便局
新潟堀之内郵便局
寺尾台郵便局
上新栄町郵便局
新潟有明台郵便局
小針郵便局
新潟粟山郵便局
新潟白山浦郵便局
新潟河渡郵便局
新潟大野郵便局
新潟近江郵便局

< 地方自治体関係 >

新潟県国際交流協会
新潟市国際交流協会
表参道・新潟館 ネスパス
新潟県庁職員有志
新潟市役所職員有志

< 団体 >

A F S 新潟支部
N T T 労組
雁わたる会

クリエイティブ2021
白根ロータリークラブ
J A 白根市
全通新潟
総合生協
地域総研
連合三条加茂地協
連合新潟
連合新潟地協

< 企業 >

新潟ゼロックス
新潟中央青果
丸一新潟青果
亀田製菓
第四銀行
新潟信用金庫
安田信託新潟支店
日本興業銀行新潟支店
東北電力新潟支店
リンコーコーポレーション
ホテル新潟協力店会

アサヒビール
石井商店
大澤商店
大沢屋
大橋洋食器
小川

尾畑酒造
鹿島建設
カンダ

キーコーヒー
北日本工芸
県都タクシー
後藤プロダクション
サイトー商会
三愛サービス

サントリー
鈴木コーヒー
高瀬物産
中野良雄商店
新潟伊勢丹
新潟クリーナー
新潟県厚生事業協同公社
新潟市環境事業公社
新潟酒販
新潟ニッタン
日本旅行

念吉
白新商会
橋本食肉店
フジカラー ビデオテック
富士タクシー
プライダルクティ
文武堂

細山商店
ホテル新潟
三國ココロラボトリング新潟支社
三島屋青果
峰村商店
都タクシー
リンベル
若木印刷所
三井物産支店有志
沢井化粧品店
福田組
新潟シティホテル
新潟日産
N T T 東日本新潟支社
グリーンシグマ
住友生命新潟支社
新発田支部
新津市部
新潟中央支部

三井物産支店有志
沢井化粧品店
福田組
新潟シティホテル
新潟日産
N T T 東日本新潟支社
グリーンシグマ
住友生命新潟支社
新発田支部
新津市部
新潟中央支部

黒崎法人支部
新新潟支部
城東支部
新城支部
五泉支部
城南支部
新潟法人支部
巻支部
大通支部
県都支部
西新潟支部

ヤマハミュージック
新発田城カントリークラブ
とん八
ダスキン万代
原田乳業
大谷商会
新潟スカイツーリスト

< 学校関係 >

新潟大学
早稲田大学
弘前大学
富山大学
新潟国際情報大学
新潟医療福祉大学
加茂市立若宮中学校
白根市立小林小学校

< マスメディア >

N H K
N T 2 1
B S N
F M 新潟
新潟日報
読売新聞
朝日新聞
市報にいがた

小泉裕子
小出泰子
高坂征美子
柑本英雄
幸村重弥
小島智子
小島陽子
五十田陽子
後藤渉
小林恭子
小林久美子
小林直
小林照子
小林伸子
小林典子
小林浩
小林孫一郎
小林美弥子
小林勇一
小林裕子
小牧健一
小松弘子
小松裕美
小村広子
小山恵里果
小山美春
近いくよ
権平康子
斎藤恭子
斎藤幸
斎藤寛
斎藤ミエ子
斎藤ミチ
斎藤豊
三枝さち子
三枝直文
坂井宏子
酒井良子
坂上元美
坂田奈穂子
酒田好和
坂田佳子
佐久間貞吉
佐久間フミエ
桜井恭子
桜井富士子
笹川章子
笹川忠明
佐々木克
佐々木英樹
佐々木美代子
笹沢佳織
佐藤京子
佐藤信幸
佐藤正
佐藤ひろ
佐藤弘樹
佐藤文子
佐藤文康
佐藤光子
佐藤美穂
佐藤みよ子

佐藤有子
佐藤裕子
佐藤由佳
佐藤幸子
佐藤佳恵
佐野幸広
三條
三條正明
下手幸子
渋谷留美
渋谷美穂
嶋田正義
嶋田真千代
嶋津文子
島津真由美
清水理恵子
ジュルフィカル・アリ・チョウドウリ
ジョン ロブソン
白井ヨシミ
シン ソクパウ
秦スミ子
進直一郎
新道
新保進
菅原友美
杉本祐子
杉山
杉山眞一
鈴木敦子
鈴木あゆみ
鈴木才子
鈴木孝子
鈴木登美子
鈴木友美
鈴木七海
鈴木真佐子
鈴木由香
鈴木由美子
鈴木義輝
須藤裕美
須藤みちよ
住田幸隆
清田啓子
清田麗子
清野玲子
関優子
関洋介
関柳子
関口悟
関山信之
袖山由美子
高島敬子
高野健也
高橋節子
高橋英子
高橋みつ子
高橋律子
高畑公彦
多賀秀敏
高山礼子

滝沢勇人
竹内スミ
竹中勝治
竹中賢一
竹中千代子
竹中秀夫
竹山昭二
田代初江
太刀川マサ
田中正太郎
田中真紀子
田中恵美子
谷口綾子
谷口良
種橋しのぶ
田原千恵
玉木文子
玉山恵一
田村敏明
田村トミ

長嶋ハナミ
中野伸子
中野満子
長浜千博
中村金彦
中村友子
中谷和子
中山亜希子
中山晴男
ニコライ・
シェルバコフ
西方純夫
西村智奈美
西村ミチ子
西村光世
西村レイ子
西山茂登威
ノイス金子
マーガレット
野上淑子
野地敦子

平沢イツ
平田敏彦
平田秀子
平山弘子
平山征夫
広川典子
廣川芳江
廣橋さち子
廣嶋イヒ子
広瀬有紀
深澤愛
福田忠弘
福田フジ
藤井めぐみ
藤井由美子
藤崎千代子
藤田純子
藤田普嗣
藤田美加子
藤本節子

本間美津江
前田恭子
前田有樹
前田佳子
前野春樹
牧野哲士
マキノ
増田久夫
町田結子
町屋麻里子
松井昭子
松浦直人
松尾聡
松尾
松沢悦子
松田章
松田智幸
松田洋子
松野直幸
マリエラ
丸山久美子
円山耕司
丸山敏
丸山富美
三浦瞳
三浦真
三國澄子
水谷研
水野雅美
余湖久江
藍建奎
皆川明美
皆川真由美
南裕子
峯田史郎
峯村康明
宮栄承
宮川智子
宮崎増次
宮村恵介
宮本幸子
三膳奈津子
向井美紀
村上信子
村木美佳子
村越治寿美
村松二郎
村山慎一
村山康成
室直子
目黒修治
目黒剛
桜澤淳子
森田義猛
森田真人
森裕之
矢島和一郎
安田智子
谷田 英
谷田健六
柳内麻貴
柳沢亨

梁取新一
矢吹るみ子
矢野真知子
山井和緒
山梶晴子
山賀初美
山崎くみ子
山崎真奈美
山崎光子
山惣
山田章博
山田栄子
山田和夫
山田和子
山谷琴子
山田弘子
山田稔
山田洋子
山田陽子
山田良子
山本美保子
横尾利平
横野修一
横浜山下教会
横山
吉田あすか
吉田均
吉田恵貞
吉野美枝
余湖久江
藍建奎
李起豪
李相福
劉ヤーチェン
ローラ・
グロッシュ
涌井秀夫
若井マサコ
若狭孝司
若杉二郎
若杉幸雄
若月章
若槻恵美子
渡辺
渡邊麻香
渡辺アヤ子
渡辺イツ子
渡邊一子
渡邊静江
渡邊順美
渡邊象子
渡邊高志
渡邊直子
渡辺美代子
渡辺泰子
渡辺幸江
渡辺幸雄
渡辺令子
渡部幸恵
渡部ふさ子

2001年10月13・14日に開催されましたバザーに対し商品のご提供、収集、10月9・10・11・12日の会場設営と値段つけ、当日の売り子、ご寄付、会場・備品貸与など、今年も本当に多くの方々からあたたかいご協力を賜りました。ここに名簿を作成し厚く御礼申し上げます。当名簿は、お書き下さった協力者名簿に基づいております。順不同・敬称略でございます。不手際により名前の掲載漏れがございましたら、どうかお許しください。またお気づきの点がございましたら、NVCバザー実行委員会までお聞かせ願います。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

ダリッカ・
ラタナナン
近嵐愛子
塚本亮
椿房子
坪井香奈子
弦巻シャーマロシ
鶴見竜介
寺尾久子
戸枝邦子
百々猛
富永宥静
友爪文子
友部有也
内藤隆雄
内藤美和
永井亜矢子
永井亜弥
中枝和子
中川優子
長沢順子

野水和行
野村
野村章子
乗松彩奈
羽賀洋子
箱岩美樹
羽沢晴美
橋本
橋本篤
橋本タカ子
長谷川杏里
畑中麻希
馬場隆史
羽生郁雄
林 香苗
林隆夫
原田恵津子
原田大樹
原三男
坂有祈子
平方保幸

藤原麻沙美
逸見枝里
ホー・
ビェト ホン
帆刈祐一
朴哲秀
星野幸子
細川正昭
堀川叔美
堀切和子
堀越桂子
本多勝子
本間紀久子
本間紀美子
本間進
本間聖子
本間武
本間近
本間夏江
本間町子
本間真弓

皆川明美
皆川真由美
南裕子
峯田史郎
峯村康明
宮栄承
宮川智子
宮崎増次
宮村恵介
宮本幸子
三膳奈津子
向井美紀
村上信子
村木美佳子
村越治寿美
村松二郎
村山慎一
村山康成
室直子
目黒修治
目黒剛
桜澤淳子
森田義猛
森田真人
森裕之
矢島和一郎
安田智子
谷田 英
谷田健六
柳内麻貴
柳沢亨

< 個人・会員 >
アロン・リトル
間由佳
青木一美
青木朗
青木マサ子
青野俊郎
青柳栄里子
赤塚ひろみ
騰川あゆみ
明間セイ
浅井
浅井康雄
浅岡香野子
阿部憲和
阿部美恵子
阿部由佳
有賀寿美子
アルス美容室
安藤由喜子
飯田圭子
飯田直子
五十嵐瑛

五十嵐幸子
五十嵐フサ子
五十嵐正人
幾見泰宗
池一弘
池田久美子
池田
池野誠
石井真一
石井玲子
石垣政宏
石黒静代
石摘記子
石沢建夫
石田
石田八起
石塚祐子
石本陽子
石山純子
泉寿美子
和泉田ヨエ
磯部聰子
市川三枝

一見恭子
伊藤重明
伊藤博明
伊藤三枝子
伊藤ミチイ
伊東泰子
伊藤百合子
稲垣由起子
稲庭左武郎
稲見繁實
井上裕子
今井愛子
今井茂樹
今井猛彦
今田和也
岩越美樹
岩田敬子
岩名ユリ子
植木和子
植木佳奈子
上窪竹子
上島ゆかり

上田伸子
臼田ミサヲ
内田トシエ
榎本由香
江花和郎
海老沼敏夫
遠藤淳子
遠藤久子
遠藤真由美
遠藤ミイ子
大島務
大杉りさ
太田晶
大鷹和彦
大竹康子
大谷敏朗
大谷正雄
大津貴浩
大野一伊
大森加寿子
大森陽
岡
岡材真里

岡崎正博
岡沢美也子
緒方恵子
緒方定子
岡林真理
岡部重樹
岡部雅裕
岡美恵子
岡義明
小川総一郎
奥田晴子
奥村仁美
小熊常雄
小熊優子
小倉路子
小田敬司
織田喜恵子
尾竹泰代
小野愛
小野才子
小野忍
小野峯生
小野裕子

小柳和子
小柳信子
甲斐守
風間亜紀子
風間理恵
櫻野公子
梶瑠子
粕谷佐智子
片岡スミイ
片桐正彦
加藤良明
蕪木尹代
金子みはる
金子有子
金子洋二
上村憲司
唐橋麻生
川上浩文
川久保裕子
川原国彦
川辺文子
神田絹子
神田敬子

神田毅
神田たづ子
北上政元
北村佳代子
北村泰
絹笠
木村一男
木村雅喜
木村美恵子
桐山カツ子
久須美朝子
窪藤るり子
窪田孝
熊倉美津子
倉茂真智子
倉島淳子
倉松妙子
栗山孝夫
計良正人
小飯塚マリ子
小泉恭平
小泉春奈

¥100

特集 NVCとお金

¥100

NVCにとってお金って何？

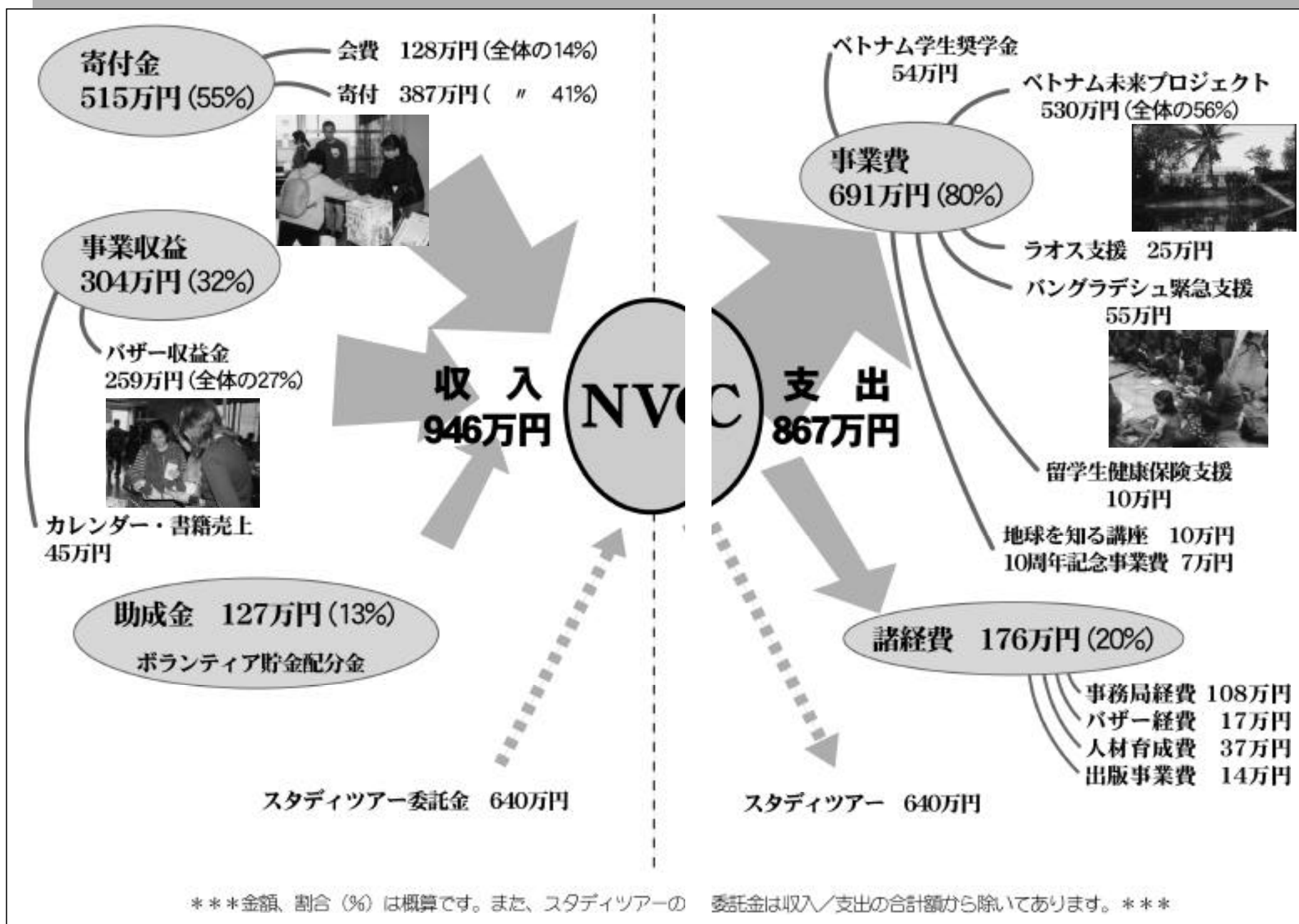
今まであまり深く考えなかったあなたもちょっと頭をひねってみませんか？

バザー収益、寄付、会費、ボランティア貯金、・・・どれも「思い」のこもった大切なお金です。その「思い」を少しでも多くの人々に届けるため、NVCは収入の8割を事業に費やしています。ただし、ただ単にお金をばらまく様なことはしません。現地に人を派遣し、現地でのパートナーシップを築いた上で、最初はまず小さく投資し、有効性が確認できれば徐々に拡大していく、という地道な作業を繰り返しています。

もちろん、実施した事業の評価も忘れていません。毎年行うスタディツアーは、人材育成と共に現地を見た上での「事業評価」という、大切な役割を担っているのです。

そんなNVCにおけるお金の回り方を、見やすく図にしたらどんな風になるだろう？
・・・ということをつくってみたのが下の図です。

二〇〇〇年度版
支援の思い
をいかにいかに？



非営利組織の収入には一般に「寄付金（会費も含まれます）」、「事業収益」、「助成金」の3種類があり、それぞれにバランスがとれていることが望ましいとされています。NVCの場合、会費とバザー収益を2つの柱に、割とバランス良く資金源が構成されていると言えるでしょう。

一方、支出は大きく「事業費」と「経費」に分けられます。人件費の支出を伴う組織では「経費」の部分が大きく膨らみますが、NVCに提供される労力は全て無償のボランティアです。これは、予算規模に対して最も費用対効果の大きな体制をとるといふポリシーの下、そうされているものです。もちろん、NVCならではの豊富な人的資源があればこそできることなのですが。

とは言え、現状に固執する必要はありません。社会的ニーズに応えるべくして存在する組織は、長期的な視野と共に、いつでも環境に適應できる柔軟性を併せ持つものです。皆さんも「今後のNVC」を一緒に考えていきましょう。

認定NPO法人制度ってご存じ？

2001年10月1日から、国税庁が示す条件を満たしたNPO法人に対する寄付が寄付金控除や損金算入の対象となる制度がスタートしました。このようなNPO法人のことを「認定NPO法人」と呼び、もしNVCがこの「認定NPO法人」になることができれば、NVCに対して寄付を下さる個人や企業が税制の優遇措置を受けることができるようになります。

具体的に優遇措置の対象となるのは以下のような寄付です。

- (4) 遺贈により受け入れた寄付金の内、一者あたり寄付金総額の2%を超える金額
 - (5) 同一の者から受け入れた寄附金で事業年度中の合計額が3,000円に満たないもの
 - (6) 寄附者の氏名又は名称が明らかでない寄附金
- 個人が認定NPO法人に対して行った寄附金（寄付金控除の適用を受ける）
 法人が認定NPO法人に対して行った寄附金（損金算入が可能）
 相続又は遺贈により取得した財産を認定NPO法人に対して行った寄附（相続税課税価格の基礎不算入）

しかしながら、今のところ認定の要件はかなり厳しく、以下のような8つのハードルをクリアしなければ認定NPO法人になることはできません。今回は、この制度の概略と共にNVCの現状を分析してみました。

<第1ハードル>

申請直前の2事業年度において、年間の受入寄付金の合計が全収入の3分の1以上であること
 前ページからわかるように、NVCの寄付金（会費も含む）は総収入の55%。ところが、ここで「な～んだ！ 楽勝じゃん！」と思うのはまだ早いのです。計算の基準となる金額は以下の様に決定されます。

- A 寄付金：受入寄附金総額から以下のものを差し引いた金額
- (1) 一者当たり寄付金総額の2%を超える金額
 - (2) 役員又は社員から受け入れた寄附金
 - (3) 同一の者から受け入れた寄附金で事業年度中の合計額が3,000円に満たないもの
 - (4) 寄附者の氏名又は名称が明らかでない寄附金
- B 収入：総収入金額から以下のものを差し引いた金額
- (1) 国又は地方公共団体の補助金・助成金
 - (2) 法律又は政令に基づいて行われる事業で、行政が受益者に代わり負担することとされている負担額
 - (3) 資産の売却による収入で臨時的なもの

・・・このようにした後、AがBの3分の1以上であれば初めて認定基準を満たすこととなります。
 NVCの場合、寄付者一人（または一団体）あたり103,000円を超える額、正会員（NPO法上の社員）の会費、募金箱に入った寄付金を差し引き、また総収入金額からはボランティア貯金の配分金もさらに差し引いた状態で計算します。その結果、
 $A \div B = 1,018 \text{ 千円} \div 6,635 \text{ 千円} = 15.3\%$
 となり、要件（33.3.....%）を全く満たさないことになってしまいました！ 残念！・・・というか、何かヘンだと思いませんか？

<第2ハードル>

直前2事業年度における次のいずれかの割合が80%以下であること

- 同一の市区町村内に居住し、又は事業所のある個人及び法人から受け入れた寄附金の合計が寄付金総額に占める割合
- NPO法人の行った特定非営利活動のうち、同一の市区町村内で行われた特定非営利活動の占める割合
- NPO法人の行った特定非営利活動により資産の譲渡を直接受けた者の総数のうち、同一の市区町村内に居住し、又は事業所を有する個人及び法人の数の占める割合

・・・第1ハードルでつまづいたものの、NVCは幅広く寄付金を募り、事業対象も単一の市区町村に限定されていないので、このハードルは「クリア」です。

NPOと税についてのワンポイント講座

<第3ハードル>

直前2事業年度等における事業活動のうち次に掲げる活動の占める割合が50%未満であること

- 対象が会員又は会員に類するものである活動
- 特定の団体の構成員、特定の職域に属する者、特定の市区町村内の個人/団体等、その便益の及ぶ者が特定の範囲の者である活動
- 特定の著作物又は特定の者に関する普及啓発、広告宣伝、調査研究、情報提供その他の活動
- 特定の者に対し、その者の意に反した作為又は不作為を求める活動

・・・このハードルも大丈夫そうですね。

<第4ハードル>

その運営組織及び経理に関し、次に掲げる要件を満たしていること

- 役員又は社員の数のうちに次に掲げる者の数の占める割合が、それぞれ3分の1以下であること。
- (1) 役員又は社員の親族及び生計を一にするなどの関係がある者
- (2) 特定の法人とその役員又は使用人である者及びこれらの者の親族等

・・・人材の層の厚さが売りのNVCです。ここも「クリア」でしょう！

<第5ハードル>

その事業活動に関し、次の要件を満たしていること

- NPO法第2条第2項第2号に規定する次の活動を行っていないこと。
- (1) 宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成すること。
- (2) 政治上の主義を推進し、若しくは支持し、又はこれに反対すること。
- (3) 特定の公職の候補者（候補者になるようとする者を含みます。）若しくは公職にある者又は政党を推薦し、若しくは支持し、又はこれらに反対すること。
- 役員、社員、従業員若しくは寄附者若しくはこれらの者と親族関係を有する者又はこれらの者と特殊の関係がある者に対し特別の利益を与えないこと。

事業費の総額のうち、特定非営利活動に係る事業費の額の占める割合が80%以上であること。

受入寄附金総額の70%以上を特定非営利活動に係る事業費に充てていること。

助成金の支給を行う場合は、事前に助成内容や募集・選定方法を記した書類を、また支給後遅滞なく実績を記した書類を国税庁に提出すること。

海外への送金又は金銭の持ち出しを行う場合は、事前にその金額・使途・予定日を記載した書類を国税庁提出すること。（ただし、災害に対する援助など緊急を要する場合は事後の提出も認められる）

<第6ハードル>

法令に違反する事実、偽りその他不正の行為により利益を得、又は得ようとした事実その他公益に反する事実がないこと

<第7ハードル>

認定に係る申請書を提出した日を含む事業年度開始の日（事業年度の定めがない場合には、その申請書を提出した日を含む年の1月1日）において、その設立の日以後1年を超える期間が経過していること

<第8ハードル>

認定に係る申請の際、所轄庁から、その法人につき法令、法令に基づく行政庁の処分又は定款に違反する疑いがあると認められる相当の理由がない旨の証明書の交付を受けていること

・・・第5～第8ハードルは、NVCの場合幸い要件を満たしています。しかし、一般にはこれらのハードルを越えられないNPO法人も数多く存在しており、現状と比較して「厳しすぎる」条件が課せられているとの受け止め方が大勢です。

NVCとしても、こうした現状を「他人事」と考えずに、正しい認識をもって注目・行動していくことが必要なのです。

・・
 国税庁のホームページでは、さらに詳しい情報を手引き書やパンフレットと共に提供しています。ご関心のある方はご覧下さい。 : www.nta.go.jp

特集・NVCとお金

特別寄稿

高知商業高校の エコメディア

枝廣 淳子（環境ジャーナリスト）

以前にインターネットの情報で、「高知商業高校がエコマネープロジェクトを計画している」ということを知りました。今月、高知県に環境研修の講師として呼ばれた際に、「ぜひお話を聞きたい」とお願いして、取材をさせてもらいました。お話をしてくださったのは、同校生徒会顧問の岡崎先生です。新聞などの記事では「エコマネー」という言葉がポンと出ていますが、何年にもわたる生徒会活動で、何を行ってきたのか、何のために、いま「エコメディア」に取り組んでいるのか、詳しくお話を聞かせて下さいました。

高知商業高校の生徒会では、1994年にアジアの難民支援の活動を始めました。

94年と95年は、募金をしたり、文化祭でパネル展示をしましたが、「そういう一過性ではない活動をしたい」「目に見える形で活動したい」という声が生徒たちからあがってきました。

そのとき、ラオスに学校を建てるなどの活動をしている「高知ラオス会」を知りました。そして、95年に高知県国際交流協会主催の「建てた学校を見に行こう」というツアーに、3年生と2年生の生徒たちと参加しました。

生徒たちは現地へ行って、「思っていたイメージと違う！」ととても驚いていました。「アフリカのようなどころかと思っていたけど、違うんだ」「モノはないけど、みんな生き生きして、時間がゆったり流れてる」。そして、「私たちが何かを“やってあげる”のだと思っていたけど、違うんだね」と。参加した2年生が3年生になり、「対等・平等」をキーワードに活動したい、といろいろと考え始めました。自分たちに何ができるのか？「ラオスで買って来たものを、こちらで売れる？」という話が出ました。何しろ、貨幣価値が10倍くらい違います。日本で売れたら、ラオスでは10倍の金額になる。そこで「では資金はどうやって集める？」という議論になりました。校長先生に出してもらい、銀行から借りるなど、いろいろなアイデアが出ました。その中で、「株式会社にしたらどうか」という話になりました。

募金ではなく、運営する会社に出資してもらおう、ということです。1株500円として、生徒のほか、PTA・職員にも呼びかけます。生徒は原則、全員購入です。

3株以上持っている、配当金の権利がつかます。ちなみに昨年は10円の配当がついています。株式のしくみは、単年度制です。毎年「今年も立てますか？」と議論をして、賛成が得られたら株券を発行します。こうして、株の発行で、毎年70万円ほどの資本金が集まっています。

96年に、生徒たちを連れて、ラオスに仕入れの旅に出ました。これは珍道中でしたよ！まず日本円で30万円を両替すると、現地のお金では、山盛りのお札になってしまいます。それを持って、見当をつけておいたところへ生徒たちが行きます。これは、という製品を作っている工場を見つくと、山のように買わせてもらったり。

何しろことばが通じません。買い物にも時間がかかります。だって、布1枚買うのに、山のようなお札を数えて渡すのですから。

こうして、仕入れてきたものを96年、97年のイベントで販売しました。生徒たちも、自分が買ってきたものから、販売にも熱が入ります。

しかし、文化祭などのイベントだけでは、なかなか売上が伸びませんでした。そこで、「町で売れないか？」ということになりました。そして市内の百貨店に企画書を出して、98年と99年に物産展を開いてもらいました。

そこでの物産展にはたくさんのお客さんが来ます。これまで文化祭での販売だと、どうしても特別な意識を持った高校生ががんばっているから買ってあげるよ、という感じになります。でも百貨店では普通のお客さんが買いに寄ってくれました。

このような活動をして、2000年には、「なぜラオスなの？」「ほかにもやるべきことがあるのではないか？」という声が生徒会の中から出てきました。生徒たちがいろいろと話し合う中で、「一般の人を対象に、地域でアクションを起こすことが必要だ」という結論になったのですね。「町に飛び出そう！」と。

生徒たちは、商店街の活性化を考えました。ちょうどジャスコがオープンした時期でした。2000年2月から、生徒の企画で、消費者500人を対象に「商店街をどう思いますか？」とアンケートをしました。その結果、「温かみのあるイベントがあれば、若者が来る」ということがわかりました。高知にはいくつもの商店街がありますが、生徒たちは「はりまや橋商店街」を選び、このアンケートの結果から作った企画書を持って、商店街の組合を訪ねました。2000年6月のことです。

組合の方々は最初、「どうせ文化祭の延長だろう。売らせてほしい、といってくるのだろう」と、半信半疑という感じで、会議室に座っていました。

ところが、生徒たちは「こういう結果をご存じでしたか？」と、商店街に関するアンケートの結果をまず突きつけたんですね。そして、ストリート・ミュージシャンを呼んだら若者も増えるだろう、とか、いろいろなアイデアも話しました。

だんだん、組合の人々が身を乗り出してきました。商店街のある人が「でもアンタ、売れ残ったらどうするの？パーゲンでもするの？」といったとき、生徒が「とんでもない！」と大声を上げました。布を仕入れてきた生徒です。「この布は1日中織ってやっと2cmしか進まないんです。それをパーゲン

でなんか安売りができません！」

そしたら、質問した人は「アンタ、商売わかってるねえ！」と手を打ちました。百貨店では2日間で90万円を売り上げたという、大人たちは目を丸くしていました。そして、「アンタら、本気なんやね。売り上げて、そのお金でラオスに学校が建ったらいいんやろ。私たちが商店街に活気がでたらいいから」と、イベントを共催する話がまとまりました。そして、昨年、はりまや橋商店街と2日間のイベントを共催しました。商店街では「こんなに人が来るとは思わなかった」とびっくり。200万円も売上が上がったのです。

しかし、今の生徒会会長の女子生徒は、商店街との反省会で、「これで本当に活性化になったのですか？」と聞きました。「2日間のイベントで、確かにPRにはなったけど」と。

そして、生徒たちの中で、「イベントなどの非日常イベントをもっと日常化したい」「どうしたらいいだろう？」と話し合いが続きました。

ちょうどそのころ、このような取り組みの話をシンポジウムで発表したときに、ある人から「その株式というのは、エコマネーみたいですね」といわれました。

私たちは「エコマネー」というのはそれまで聞いたこともなく、知りませんでした。それでインターネットなどでいろいろと調べてみたのです。

そして、いまやろうとしている「エコメディア」のプロジェクトが生まれました。

エコマネーといわずに、エコメディアといっているのは、「これは結ぶ媒体に過ぎない」と考えているからです。

しくみは記帳方式です。はりまや橋商店街と組んで、高校生が商店の手伝いをする、15分を単位に、「優」というエコメディアが記帳され、店からの割り引きなどと交換できるしくみです。

今月と来月、商店街とのイベントがあるので、並行してエコメディアの交換会をします。また、校内交換会も計画中で、生徒たちが「やってほしいこと」「できること」をリストにしています。たとえば、「数学が教えられる」とか、「英語を教えてほしい」とか。

やっている生徒たちは面白がっていますよ。商店街には40数店舗ありますが、やはり理解度も違います。生徒たちは各店を回って説明するんですね。これも交流のきっかけになります。

ラオスの方は、生徒たちの活動によって得られた資金で、現在5校目の学校が建設中です。それぞれ5つの教室と職員室があります。今後は自立型の援助が必要になってくるだろう、と思っています。

顧問としての私の役割ですか？ 段取りと環境設定につきま。実働はすべて生徒です。でもそのまえに、限りなくリアルな教材に触れさせる、その環境設定に心を砕きます。この人に会ってみたらどうか、とか。

段取りということでは、私の時間とエネルギーのうち、生徒たちに向けられるのは半分だけです。あとは、学校や関係機関への説明や段取りに費やしています。

生徒に接するときですか？ 私は「公平な分担」や

「平等」はやらないんです。

不公平があっても、それぞれの生徒に、最適な、いちばん得意なことをやらせるようにしています。あと、やはり気を遣うのは、ラオスに生徒たちを連れて行くときですね。生徒12人に先生6人、2人に1人つきま。言葉もできないわけですから、安全の面には一番気をつかいます。

12日間で24万円ほどの費用のうち、半分強は自己負担です。旅行会社を通さないし、通訳も、日本で生活しているラオスの方が喜んでくださって、ボランティアでやってくれます。ラオスのことを思ってくれる日本人がいる、というので、本当にうれしいそうです。その方のおうちでいつも大歓迎してくれます。

生徒の親たちへの説明会では、どんなにいい体験ができるかということ、とうとうとしゃべって最後に「でも死ぬかも知れせん。保険には自分で入ってください」といいます（笑）。

ラオスでの活動については、『海を越えたボランティア活動 ラオスに学校を贈った生徒会』（岡崎伸二著、(学事出版)1600円)にも書いてあります。生徒会の部員は現在24人です。ほとんどが女子です。(学校自体も、6:4で女子が多い)女の子が元気ですし、しっかりしていますよ。よかったら、生徒たちに話を聞いてみますか？よく「特別な活動をしている生徒とと思っていたが、普通の子たちなんですね」といわれますよ。

こうして、先生は放課後の校内に探しに行ってくれ、2年生3人の女子生徒が礼儀正しく応接室にやってきました。いろいろと話を聞かせてもらいました。

ラオスへ行って活動できたことがいちばんうれしい。ラオスの人はみな、優しく親切なんです。笑顔が本当に素敵なんです。

エコメディアですか？ええ、それは何？ってよく聞かれます。「お金ではなく、通帳に記入する方法で、お金で交換できないものをやりとりするしくみです」とひとりひとりに説明しています。

今後ですか？生徒会では、2年ごとに次のステージに移ってきているので、次のステージに入る準備をします。地域との交流をどうやって深めるか、ということも考えるつもりです。

確かにフツの高校生たちでした。でも、自分たちのことだけではなく遠いラオスの人々に思いを馳せる様子、しっかりと自分の考えを述べる様子、突然の来客にも丁寧な心を含めて対応してくれる様子に心が熱くなりました。

目がキラキラと明るく輝いている生徒たち、そして、それを見守る先生でした。

この文章は、国際的な環境ジャーナリストであり、著名な通訳・翻訳者でもある枝廣淳子さんに許可をいただき、同氏のメールマガジン「枝廣淳子の環境メールニュース」567号から転載させていただきました。枝廣さんのホームページ：www.ne.jp/asahi/home/enviro/もぜひご覧下さい。

NVC地球を知る講座実施報告1) - 日米NPOの違い -

関 洋介 運営委員

NPO(非営利民間組織)という言葉は私がNVCを通して見ている限り、かなり浸透してきたと感じている。ただ、その英語名の轟くアメリカにおいてNPOがどのようなものであるか、ということはNVC内で取り上げられる機会があまりなかった。そこで今年度7月15日に、私が参加したインターンシップ・プログラムを行っている日米コミュニティ・エクスチェンジ(JUCEE)の事務局長代理・大出恭子さんを新潟にお招きし、お話を伺った。

演題は「日米NPOスタッフの温度差」。例えば日本ではNPOに就職するということがまれであるのに対し、アメリカのNPOにおいては有給のスタッフがいるのは当然であり、かなりの高給取りであることもある、といった内容が話題として出された。方法も講演形式ではなく、来場者に講座に来るまでのイメージを書いてもらい、それと大出さんの現場での感想を比較するというものであった。このような方法自体が、日米のNPOの交流をはかるJUCEEならではのものではあったと言えよう。

その中でも自分に興味深かったのは、「アメリカのNPOは個人が強くて、日本のNPOはグループが強い」という比較についてであった。これはつまり、アメリカにおいてはスタッフ一人ひとりが専門的な知識・技術を持っていて個人単位で複数団体を渡り歩く、ということが起こりうるのに対し、日本においては特定の団体への愛着、もしくは団体の構成員の結束力というものが活動自体に影響を与えうるということである。ここで言えるのが、私がこの点に興味を持った最大の理由が、どちらがいい、と一概に言えないということである。アメリカの場合、もちろん有能な個人はどこに行っても活躍できるかもしれないが、一人が抜けた場合その人の穴を埋めることが困難になる可能性がある。逆に、日本の場合簡単に言えば仕事を「助けあって行う」ということが自然にできるというわけである。

実際、私は春先の米国研修を終えてアメリカの現場の方法を日本でも応用したい、という気持ち

が強くなったが、こうしてみるとアメリカのものを取り入れるのではなく、ヒントを得るために覗いてみる、というスタンスが必要なのではないかと思った。講演中、不思議そうな顔をしている参加者を見て私は正直「もっと納得してほしい!」という気持ちを抱いた。しかし、別にアメリカのやり方を採用した方がいい、悪いということではなく、双方を比較すること、むしろその過程に時間を費やすことの方が重要である。そのことを今回の講座で私は思い知ったと言える。

(*日米コミュニティ・エクスチェンジ、およびインターンシップについてはNVC会報『かけ橋』前号、もしくは<http://jucee.org>を参照してください)

NVC地球を知る講座実施報告2) - 坂東和郎先生をお迎えて -

渡辺 順美 運営委員

NVCでは1999年以来、バングラデシュのチャンドプール県サウスパリア村の母子家庭を支援してきました。今年の1月に現地を訪問した際、NVCバングラデシュの方からバングラデシュ全域にわたる地下水の砒素汚染の問題について話を伺いました。帰国後、どうしてもこの話が気になる、地下水の砒素汚染状況について情報を集めたところ、チャンドプール県は、バングラデシュのなかでも最悪の砒素汚染地域に属することがわかりました。そこで、サウスパリア村の地下水の砒素汚染に対して、私たちのできる範囲で具体的に何をしたら良いか検討するため、砒素汚染のデータを収集始めました。同時に、この問題に直接取り組んでこられた方のお話を可能な限り伺うべく、アジア砒素ネットワークの方を始め、何人かの方に連絡をとり始めました。

9月17日に行われた「地球を知る講座」は、そうした取り組みの中で実現したものです。講師の坂東和郎先生は、応用地質研究会のメンバーとして中国内蒙古自治区とバングラデシュの地下水砒素汚染調査に携わるとともに、1999年からJICA専門家およびJICA調査団員としてバングラデシュに赴かれ、地下水の砒素汚染問題に取り組んでこられた専門家です。当日は、レジ

ュメと現地で撮影された豊富なスライドをもとに、砒素汚染の現状と対策についてお話を伺いました。特に、砒素汚染対策については、「農村部での対策」とそれに続く「代替水源対策」の流れについて、フローチャートを使って説明があり、砒素汚染対策に限らず、バングラデシュの農村部で何らかの支援を行う際の取り組みの手順として大変参考になるものでした。また、現地での砒素汚染調査に使用されている「簡易分析キット(廣中式フィールドキット)」のデモンストレーションも行われました。ティッシュボックスの3分の2ぐらいの箱に、測定に必要な器具がすべて収められ、しかも、砒素濃度が色により一目でわかるという優れたものでした。最後の質疑応答では、講演の内容はもちろんのこと、新潟平野の現状にも話が及び、バングラデシュの問題から私たちの住む地域の水問題、環境問題を考えることができた講演会となりました。

席を移した懇親会では、坂東先生、新潟大学の久保田先生を囲み、農村での体験談、お酒の話など、バングラデシュでの経験に即したお話から、先生の環境汚染に対する考え方で様々なお話を伺うことができました。今回の講演会では、砒素汚染についての理解を深めることができたと同時に、実際の経験と客観的なデータをもとにした誠実な説明が特に深く心に残りました。

ボラフェス2001 エイ!エイ!FOR~ に参加しました

関 洋介 運営委員

今年9月8日、新潟市内ユニゾンプラザで上記の名前のイベントが行われた。当イベントは、非営利の市民団体間の交流、行政・企業・NPO間の協力、及びボランティアの社会的な広がり、以上3点の促進を主な目的とした。各団体の活動分野やセクターと言ったものにとらわれず、何かのために活動している人の集まるものに、ということで「エイ!エイ!FOR~(~のために)」と名づけられたわけである。イベント自体は大きく分けて各団体の活動紹介(展示)、アクションプラン(各団体の活動を一連のものとしてリストにまとめたもの)、集客用のアトラクション、そし

て交流企画、以上4部門によって構成された。当日は、予想を遥かに上回る来場者を迎えることができた。

しかし、当然すべてがうまくいったわけではなかった。新潟県庁、生活企画課の社会活動推進係からの呼びかけで集まった実行委員の中、自分は交流企画担当であった。今まで「国際」というくりの中でのフォーラム等の経験はあったが、福祉・環境からまちづくりまで、分野横断的なイベントの企画は自分にとって初めてであった。交流企画で、「物々交換・価値価値交換」という部門があった。これは、各団体が提供できるもの・欲しいものを表示し、交渉が成立すれば物(例えばNVCならバザーの品物)、もしくは価値(ボランティアスタッフとして参加すること)などを交換できるというものであった。これは交換という作業を通して各団体同士が悩みなどを共感し合える場になれば、という思いがあった。しかし、内容は紙に記入されただけであり、実際人と人が話し合う、という場面は見られなかったのである。ここでの教訓としては、「交流」というものを促進するにはそれなりの仕掛けが必要であり、しかも今回のように対象個人の活動が多分野にわたる場合、さらに手を練らなくてはならない、もしくは強い思いを持たねばならないということであろう。

お知らせ

掲載情報を募集します!

かけ橋を読者相互の情報共有の場として活用するため、掲載情報を大々的に募集します! 国際交流やNPO全般について耳寄りな情報がございましたら、どしどしNVC事務局までお寄せください。

寄稿される場合、文字数は問いませんが紙面の都合で調整させていただく場合もあります。次回「かけ橋19号」は、総会後の6月下旬頃発行予定です。掲載情報は6月上旬までにお送りください。

ラオスへの想い - ラオススタディツアーレポート -

永井 亜弥 会員

今年の9月4日から16日までの2週間、私は新潟大学国際ボランティアサークルが中心となって企画したラオスへのスタディツアーに参加した。そこで私たちは世界遺産に指定された都市ルアンパバンにあるCCC(子ども文化センター)を訪れた。また首都ビエンチエンを拠点に活動するNGO、JVCの活動を見学させていただくために村に同行した。

< CCCにて感じたこと >

私たちが訪問した初日、子ども達は歌と踊りで歓迎してくれた。私たちもお返しに日本の歌を...と思ったのだが、ほとんど思いつかない。いかに自分が日本について知らないかを気づかされた。また、先生が「初め」と口に出さなくても年長者を中心に集い、歌や踊りを楽しそうにする子ども達の姿が印象的だった。子ども達と何か一緒に楽しめないかと運動会と写生会、日本食試食をおこなわせていただいた。写生会においても、その表現力の豊かさに驚かされた。子ども達の中に存在するたくさんの豊かさを感じた。



CCCの子供たちと。 - ラオス・ルアンパバン

CCCはいわゆる児童センターである。世界遺産に指定されたことによりルアンパバンの町には観光客が多く訪れるようになった。そんな中、町で観光客相手に商売をし、そこで得たお金をもとにドラックや酒の世界に入る子どもが多くいたという。それを放課後の時間を有効に使うことで未然に防ごうという目的でCCCは運営されているという。歌や踊り、英会話や織物の教室があるという。子ども達の笑顔を見て、これからもCCCの活動が続いてほしいと強く思った。

< 村で過ごしてみても... >

私たちはJVCの活動を見させていただくために、ナトン村というビエンチャンから車で3時間ほど離れた村を訪れた。彼らは村で自給自足の生活をしている。村で私たちはJVCが緑肥をまき、実験しているという田を見せていただいた。しかし残念なことにその田では害虫が発生してしまい、思うように稲が育っていないとのことだった。

農業だけで自給自足している彼らの生活。テレビは村に一つしかない、電気さえ通ってない。村で何が必要なのかを考えてみたのだが、日本での生活と

比べれば必要なものだらけに感じた。しかし、彼らの目線に立ち考えた場合の必要なものはなんだろうか。

それは、生活する上で必要な農業の収穫を良くすることであり、生きていくうえで必要な乳児の死亡率が高いのであるなら衛生状態を向上させることであろう。JVCはラオスで生産力の向上を推進したり、牛銀行や米銀行などのシステムを広めているという。また衛生上必要な事項を記した冊子を配布したりしているそうだ。土地や生態系保護のためになかなかうまくいかない面があると思うが、彼らが生活をし、生きていく上で必要な支援なら推進してほしいと感じた。

また、彼らの家族や隣人で助け合っていく生活を見て考えるようになったことがある。それは支援の手が入ることのマイナス面もあるのではないかということである。例えば、支援することでたくさん作物が収穫でき村の生活が豊かになる。働き手がそこまで必要でなくなって、余剰な労働力が町へ流出してしまうかもしれない。また村人と異なる文化をもった人間がその村に入り、物質的に豊か暮らしを垣間見せることの影響である。人的にしる資金面にしる支援することの難しさを感じた。日本は経済的な豊かさを実現する過程で地域社会や国民の生活環境は急激な変化にさらされ、さまざまな問題と困難に直面することになった。例えば、それは水俣病やイタイイタイ病などの公害問題や工業都市周辺地域および、その関連地域の自然・環境破壊であり、過疎化や過密化による地域社会の絆の薄れでもあった。私たちは日本に住み、その現実を目のあたりにしているから村に...ラオスにそうやって欲しくなくて「このままで」ということを願ってしまう。しかし日本人である私がラオスをこのままでいてほしいとばかり望むことはできないと思う。中にはやはり町に出て働きたいと思う人もいるだろう。そこに自分のやりたい夢があるならそれは拒めないのではないか。村から人がでて行く現実には悲しいけれど、もしそこにやりたいことがあるのなら、それは否めない。色々な夢を持つ権利が世界中の人にあると思うからだ。

ただ町に人が流れた結果、スラムが形成され、ストリートチルドレンが生まれるという可能性も否定できない。インドネシアやベトナムでの光景をこのラオスでも目にする日が来るのかもしれない。今のラオスでのこんなに美しく豊かな景色の中に身を置いたため、その気持ちは強くなった。

来年のカレンダーはこれで決まり！

毎年好評のJVCカレンダー。今年もNVCのロゴ入りで販売します。"Living Together"をテーマに、今年も目を見はるような写真が満載。ご希望の方はNVC事務局(025-222-7899)までご連絡ください。

このカレンダーの販売による収益は、ベトナム・ラオス・バングラデシュなどにおけるNVCの国際協力事業のために使われます。



JVC・アフガン難民救済緊急募金 のお知らせ

JVCがアフガニスタン難民・国内避難民への食糧・医薬品救援を目的に緊急募金を行っています。ぜひご協力ください。

日本国際ボランティアセンター(JVC)は、アフガニスタン国内の避難民に対し、現地のNGO「O・M・A・R」(Organization for Mine-Clearance and Afghan Rehabilitation)と協力して、食糧・医薬品の救援を始めます。

【支援内容】(10月末現在の計画)

医薬品：下痢・肺炎などの治療薬、抗生物質等
食糧：小麦、豆、食用油。(乳幼児用に高カロリービスケット、粉ミルクも検討)

【対象・地域】

ジャララバード周辺の村の困窮度の高い家族に対し、食糧を配給。3年続きの旱魃に続いての空爆により、食糧が決定的に不足、危機的状況にある。ジャララバードで活動中の移動診療チーム2組を通して医薬品を供給。病人・けが人の急増で、医薬品の消費が3倍に急増。医薬品が欠乏している。

【支援協力先】

アフガニスタンのNGO「O・M・A・R」
(=Organization for Mine clearance and Afghan Rehabilitation)
10年余、医療活動や地雷予防の活動を行ってきたアフガニスタン人のNGO。

【予算】1,000万円(配給物資の購入費80%~
輸送・通信費、現地要員費20%以内)

<<アフガニスタン救援募金はこちらへ>>

郵便振替 00190-9-27495 JVC東京事務所
(通信欄に「アフガニスタン支援」とお書き下さい)
インターネットでチェック、クレジットカードのオンライン募金できます。

詳しくはJVCのホームページ:

http://www.jca.apc.org/jvc または
JVC事務局: 03-3834-2388

E-mail: jvc@jca.apc.org

までお問い合わせ下さい。

リレートーク

NVC's Human Network

矢吹あゆみさん（前回）からバトンタッチ
水落 春雄さん 会員（中之島町）

今回、矢吹さんからトークリレーをもらった水落です。NVCとの関係は、矢吹さん、小林伸子さんと同じ新潟県の「青年海外派遣事業」でした。そこで同じく「ベトナム」に関わった者として去年の夏に「洗濯機プロジェクト」と題して、ベトナムにあるキークワン寺に送る活動に参加しました。中心になったのは小林さん、矢吹さん、それになんと言っても「長岡技大」のベトナム、タイの留学生達達の存在です。そこでは自分達の故郷に、そして故郷の子供達を励ましたいと言う優しく、強く、逞しい気持ちに出会うことができました。イベント当日まで何度も重ねたりハーサルや、見えないところでの「地味」な作業。

準備の途中から、参加してくれた沢山の皆さん。そして、当日足を運んでくれた方々のお陰でプロジェクトは成功と言う形で終わりました。今思うことは、「一人は小さくても・・・みんな集まれば大きくなる」。そして、それを継続、また発展させることの難しさです。あまりに力を入れすぎて、息継ぎしませんでした。今度は「肩肘張らずに」出来ることからまたはじめたいです。何も取り柄の無い私ですが。みなさん、よろしくお願いします。



この「かけ橋」の編集者、金子洋二さんにバトンタッチします。私の数少ないNVC関係者の知り合いの一人です。（今回の原稿の件で初めてお話をしたんですが・・・）

前野 春樹さん（前回）からバトンタッチ
峯村 康明さん 運営委員（新潟市）

前回のリレートークで前野春樹先輩よりご指名を頂きました峯村康明です。前野さんはその際に「峰村」ではなく、「峯村」であることをお書き添え下さりました。しかし...いまだに多数の方に「峰村」と間違われ続けています。そして一言付け加えるのであれば前野さんは馬場さんと間違われることがしばしばあるようです。さて、前野さんと私とは大学のサークルで知り合いました。そして、このサークルを通じてNVCを知りました。大学1年生の頃からNVCの運営委員会に顔を出すよ

うになり、スタディーツアーにも参加しました。今はNVC歴2年半というところで。ホームページの作成も手がけています。私以外にも学生会員は何人もいます。大学生生活いろいろな過ごし方があると思いますが、私の場合は木にたとえるならばNVCという学外の活動に参加するという一つの枝を持ちました。学生という立場に対してはいろいろな見方があると思いますが、幹を太くすると同時に枝を伸ばすことも大事であると思います。曖昧な表現ですがこんな風に感じています。

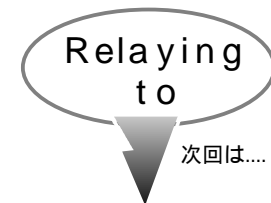


さて、今回は...。幾見泰宗（いくみよしむね）さんをお願いします。幾見さんとは2001年夏、マダガスカルツアーで初めてお会いしました。次回の原稿、よろしくお願ひ致します。

照光 真さん（前回）からバトンタッチ
筒井 昭仁さん 会員（福岡市）

10月終わりに、沖縄の久米島に水道水フッ素化実施計画の事前調査に行き来しました。そこで作られる美味しい泡盛の原材料は昔からタイ米です。蒸留という技術は錬金術としてメソポタミアに発し、そこから西に行くとブランデー、ウイスキーに、東は雲南省（あの美味しかったラオスの"ラオラオ"も）あたりを経由して原料と技術が一緒に沖縄に入って泡盛、焼酎になったようです。沖縄での食べ物は、台湾にもあり、さらには雲南省やタイなどにもそっくりのものがあつた。福岡の屋台などは、このいずれの地域にも見られます。このような場合、現在の国境など関係のないGlobal、あるいは逆に同じ文化圏としてのLocalという形容詞の方が適当かもしれません。しかし「架け橋」となると何となくInternationalが似合ったりします。Global, Local, International, Multilateral, どれをどの様に使えばいい

のでしょうか？誰か教えて下さい。私が携わっている歯科保健の分野でも、このようなわかりにくさが出てきています。まず、健康と病気の境目が見えにくくなりました。また、むし歯も歯グキの病気も今では生活習慣病と位置づけられています。結果として「あなたの生活を・・・するんですよ」が大事となり、本人の出番がだんだん大きくなってきています。医者、歯科医などが「私があなたの病気をなおしてあげましょう」と主役を演じていた医療が、住民一人ひとりが主役となってよりよい生活習慣を維持するという風になってきました。行政や医療関係者の役割も、健康行動を支援したり、そのための環境づくり、政策づくりなどに変化してきています。主従がひっくり返る事態（本来の姿？）の到来です。なんだか、NVC活動と自らの仕事も「支援」で括れる境目のないところにはまり込んでいます。



今回は、2回のスタディーツアーと一緒にになりました五泉の宮崎増次さんをお願いします。

藤田 純子さん（前回）からバトンタッチ
大竹 康子さん 運営委員（新潟市）

私、戦争は嫌いです。NVCのスタディーツアーでタイの難民キャンプを訪問し、帰国した日に湾岸戦争が始まり、また、クロアチアの女性戦争犠牲者救援センターを訪問し、難民キャンプに向かっているときに停戦協定が切れて砲撃の音がした。犠牲になるのは何時も一般市民です。8月15日がくるたびに「疎開しないで親と一緒に死ねばよかった」といった疎開児童の言葉。親の居ない同年代のあの人たちはどうやって生きていったのでしょうか。二度と戦争はしないと誓い憲法でも戦争放棄をうたっている、平和の大切さをみん

なが知っているし、望んでいる。テロは絶対に反対である。憎しみの報復からは報復が生まれる。平和を甘受する日本人にできることは隣人愛の手をいかに差し伸べるか、である。自衛隊の派遣が平和の役に立つのか。NGOの活動にも限界があるが難民救援や調停など武力によらない日本らしい仕事があるはずと心の中では思っている。カナリア諸島のテルデ市の広島・長崎広場に、日本の憲法第9条のモニュメントがあると聞いたことがある。世界の人々も平和を希求しているのだ。何としても一日も早い戦争終結を願うものである。



次は第1回スタディーツアーにご一緒した斉藤恭子さんをお願いします。

事務局 だより

バザーを終えて

今年は不況の嵐の中のバザーで売上額を伸ばすことはできませんでしたが、2日間で295人ものボランティアの売り子さんが大きな声を上げてがんばって下さり、又秋のバザーラッシュの中を1,852人もの人達が会場に足を運び、お買い上げ下さいましたことに感謝申し上げます。

また、今年は売り子さん達からもアンケートに協力していただきましたので、大いに参考にして、今後に活かして行きたいと思っています。

新年会のご案内

NVCの恒例の新年会を下記の通り計画しました。今年も多国籍料理を食べながら2002年のNVCを考えたいと思います。友人知人ご家族を誘ってご参加下さい。

日時 2002年1月20日(日) 午前12:00～午後3:00

会場 新潟市総合福祉会館4F 401会議室

料理をお手伝いして下さる方は午前10:00に集合願います。

会費 1,000円

カレンダー販売のお知らせ

今年もJVCのカレンダー2002年(NVCロゴ入り)の販売をします。今年のテーマは"LIVING TOGETHER"(いっしょに生きる)です。1部1,500円です。

カレンダーの収益金は農村開発、環境保全などアジア、アフリカの人達の生活改善のために使われます。どうぞお買い求め下さい。(本誌17ページもご覧下さい。)

会費納入のお願い

会費は会の運営および事業に活かされています。うっかり忘れていた方は会費の納入にご協力をお願いいたします。

(年額)

個人会員： 1口 12,000円以上 (高校生以下は無料です。)

夫婦/家族会員： 1口 20,000円以上

大学生： 1口 3,000円以上

団体会員： 1口10,000円以上

(振込先)

郵便振替口座番号 00660-2-21594 加入者名 NVC事務局